ヒュームにおける情念論　その二

荻　間　寅　男

要　旨

「理知は情念の奴隷であり，かつただ奴隷であるべきである」というヒュームの主張は，十七世紀以来イギリスの思想界に支配的であった道徳的懐疑主義に対しての彼の反論の核心をなすものである。

小論は，ヒュームの情念の生起する過程の解明を取り扱った前稿を承けて、情念の取り扱いがヒューム哲学全体にいかなる意味を有するものであるかを明らかにする。後年の哲学著述の書き換えにおいて，その部分が大幅に縮小するのは，ヒュームの自己の哲学は懐疑論ではなく，かえって道徳的懐疑主義を批判するものであることを鮮明に示すゆえであることを明らかにする。

問題の所在

情念の解明は近代の哲学において初めて取り上げられたきわめて新奇な哲学的問題であるが，心の働きの理解においてその重要性はけっして否定出来ない。しかるに，このような重要な課題の取り扱いに着目し，はじめ相当の分量をその検討にあてたヒュームが，円熟期に達していったいなにゆえにみずから開拓にかかわった新領域の研究推進を放念するに至ったのか。いったいヒューム哲学において，情念の解明はいかなる意味を持つものであるか。情念の生成の過程の解明に注目した前稿に対して，本稿はヒューム哲学全体に対する情念論の持つ意義について，解明することとする。

(一)

ヒュームの思想に対する接近は今日大きく二つの立場があると言えよう。一つは，哲学者ヒュームに対する哲学的興味からの接近である。主に，ヒュームが最晩年「印刷機から死産」(4:i,2)したと述べ，生前再版しなかった処女作『人性論』をもって，その代表作と見なす立場からの接近である。あと一つは，ヒュームが哲学者としてでなく生涯歴史家・著述家として盛名をはせたことをもって，歴史・政治社会に関する著述をその代表作ととる立場である。これら二様の接近は一般に結合することなく，哲学者と歴史家・著述家との二個の別個の特質をもつ思想家として，ヒュームは捉えられてきたといって不適切ではない。

さらに，ヒュームが文名を揚げたのは歴史家･著述家としてであることは，当代のイギリスが歴史･政治社会において著しく大きな変換を経験しつつあったという事情にもとづく。少数の限定された読

者しか存在しない哲学著作に対し，広範な読者層をもつ歴史・政治社会に関する著述は一般的に再々の刊行が期待された。しかし，ヒュームの政治社会に関する著述はその哲学とほぼ同時期に書かれ，哲学書出版失敗直後に彼に出版の成功と慰めをもたらした。これは大陸諸国における二様の接近を固定することになったということが出来る。その著作の当時の翻訳状況から判断すれば，哲学者としてヒュームを受けとめたのは，かかる歴史･政治社会の変化が迂遠であった地域においてであり，歴史･政治社会の変化が身近であった地域においては，歴史家・著述家ヒュームが親しまれたとみなすことができよう。

しかし，このような哲学思想への別個の二様の接近は，ヒュームの円熟期以降の時期においては一般的になるが，ヒュームに先行する時代においては奇異であったことを忘れてはならない。ホッブズ，ロックら先行した思想家はほとんど皆狭義の哲学著述をものするかたわら，政治・社会に関するおのれの思想を世に問うている。読者の受け止め方はともかく，それらの思想家において，狭義の哲学と政治・社会に関する思想が統一なく別個にあるということは決してない。ホッブズも『リヴァイアサン』において，人間の思考の特質と同時に，人間社会の特質を考究する。また，世の読者も，決してそれら思想家の言説が統一ないものと見ることはなく，よって端的にはホッブズを利己的人間を描き，万人闘争を宣伝する道徳的懐疑主義を代表する者として攻撃したのである。

ここに，ヒュームが不評であり，懐疑論無神論の表明と攻撃された処女作『人性論』を生前に再版することをためらった大きな理由の一つがあると推測することが出来る。

他方，『人性論』自体の内容に，ヒュームが不満を覚えなかったとは断言し難い。『人性論』は出版から十数年後に哲学三部作として書き直される。ヒューム哲学における主題の取り扱いは，処女作『人性論』とその書き直しである円熟期における哲学三部作においてのそれとでは内容上大きな差異がある。

概して云えば，『人性論』の出版時の不人気が「内容でなく形式」(4:i,3)に由来するという判断によって円熟期のヒュームは内容を一層鮮明に浮かび上がらせるために，彼が不要と見るいくつかの主題を割愛するとともに，その重視する主題に含まれるいくつかの論点をも省略する。

外的形式においても，「青年期の客気」(4:i,158)，「熱情」(4:i,187)を示す『人性論』において，情念の取り扱いが著述全体の約四分の一を占めるのに対し，三部作は全体そのものがかなり圧縮されるが，その書き替えにおいて全体の十分の一にもみたない分量になることから，きわめて限定された紙数における取り扱いに変わっている。体系的に三編構成の処女作の第一・三編は約十年後に『人間知性研究』，『道徳原理研究』⑵（以後『両研究』とする）としてそれぞれ独立の著作として上梓されたが，第二編はそれらに数年遅れかつ『小論文四編』の一編の『情念小論』⑶として縮小されたものとして，公表された。

『人性論』第一・二編は本来，知性と情念という「完結した一連の論究」(1:xii)をなすとされた。

しかし，第一編は時間・空間論，外界存在の問題等，直接第一編の知性の考察には関係しない論題を含んだ。また，第二編も自由と必然，意志等狭義の情念に関しての哲学的議論に関与しない論点を有した。自由と必然は『人間知性研究』において論じられることを除いて，これらは書き改められた『両研究』においてほぼ廃棄され，心理過程の分析なども簡略化され，全体的に縮小されている。ただし，このような内容の変更にもかかわらず「印刷機から死産」した『人性論』の内容を知るものは僅かしかいなかったことから，人々のヒューム哲学の受けとり方は変わらなかったと考えられる。したがって，当時の大半の読者は書き換えられた『両研究』によってのみ，ヒュームの哲学著述に接するしかなく，その情念に関する考察は，書き改められた断片的な『情念小論』によって知り得るのみであった。

（二）

『人性論』第二編は三部構成である。第一部は「自負と自卑とについて」，第二部「愛情と憎悪とについて」，第三部において「意志と直接情念とについて」を扱う。

端的に云えば，第一・二部において情念は一切の感覚の印象，身体的快苦から生じる二次的内省的印象とされる。情念は快不快から直接に生じる直接情念と，快不快を引き起こす原因と自己ないし他者という対象の組み合わせから産み出される自負・自卑・愛情・憎悪という四つの情念を主要なものとする間接情念に区別される。

ヒュームは情念を知性と「完結した一連の論究」をなすものとして扱う。したがって，『人性論』の第二編「情念について」の解明において，基本的には第一編「知性について」の解明の方法が用いられる。すなわち，「結果は多数でも，結果のおこる所以の原理は普通にはきわめて少数かつ単純である」ゆえに，心的現象を適切に説明する基本原理を追求する。想像が心に浮かぶ想念を「置き換えかつ変え」(1,277)て，心にさまざまな思いを抱かせる。想像が心のさまざまな想念を組み合わせて知性の生起を示したように，情念の生起の条件を解明するとする。

自負・自卑・愛情・憎悪という四つの主要な間接情念が，情念の生起の条件を解明する手掛かりとされるのは，快・不快を引き起こす原因である感覚的気持ち，と自己と他者というその情念の対象がいわば「四辺形」(1：333) を構成するゆえである。それを軸としてその他の間接情念の生起の条件の解明が試みられる。間接情念の発生には，その情念の対象に対し観念間の関係をもつと同時に，情念自身において感覚的気持ち，すなわち印象間の関係をもつという二重の関係をもつことがヒュームの示す四つの間接情念の生起の条件の説明である。

ヒュームによれば，自負または自卑の情念が心を動かすとき，心の視線は自己にすなわち対象としての自我に固定し，印象が情念とは別に産む感覚的気持ちは，それに類似し対応する印象すなわち感覚的気持ちに容易に転換する。感覚的気持ちが固定され，対象として他者をもつとき，愛情として現れる。対象を他者として感覚的気持ちが変わるとき，憎悪が現れる。ここに，間接情念の四辺形が構

成される。これを軸としてその他の間接情念の生起の条件を解明することが可能であるとする。

間接情念を中心にしたさまざまな情念の生起の事情は，ヒュームの洞察の深さを示す。しかし，その入念細密な考察は四つの主要な間接情念から迂遠な情念情感におよぶと，ヒュームが初めに排した単なる情念の入り組んだ現象の記述に立ち入らざるを得ないことになる。

しかしながら，ヒュームの提示する情念の発生の事情は説得的であるととることができようか。われわれは受け入れることが出来るものであろうか。

『人性論』第二編第一部・二部の立ち入っての検討は，ヒュームの一見入念細密な心の機能の分析が，きわめて脆弱な論理に支えられたものであることを露にする。

ヒュームの議論は，基本として二重の関係をおく。印象間の関係と観念間の関係の二重の関係が間接情念の発生の条件とされる。しかし，第二編冒頭に掲げられた印象・観念の定義は重大な困難を含み，第二編全体の議論を崩壊させる危険を含む。第一編同様に，知覚は印象と観念に区別され，観念は印象の淡い残像である。感覚の印象は寒熱・飢渇・快苦が心に起こすものであり，二次的あるいは内省の印象はその感覚の印象から直接にまたはその印象の再現である観念から生じる。原生的印象が感官印象と一切の身体的快苦であり，二次的内省印象が情念情感である。

しかし，ヒュームは，心は寒熱・飢渇・快苦など原生的印象を想像によって，感官の印象と快苦に区別するという第一編との矛盾を示す一方で，二次的内省印象である情念情感を「単純斉一的」(1:277)，「本源的」(1:415) とする不合理を示す。第一編が示すように，心が勢いと活気によって観念と印象との違いを見いだすことが出来ないならば，想像がそれらを区別するしかない。想像にそのような指示を受けた知覚は観念であり，もはや印象ではない。また，二重関係により生起する印象である間接情念を単純斉一的，本源的とすることは不合理である。情念の生起は想像の働きがあって可能という見地が根本にある。

この矛盾・不合理の根底には，ヒューム自身必ずしも自己の説明に納得していないことがあると思われる。第一に，情念に想像そして理知が大きく影響を及ぼすことを認める。

「情念と想像の二つの機能が互いに関連すること，換言すれば，観念の関係が情念に影響すること」(1:340)

は明白とされる。それに止まらず，

「想像と情念との二つの心的機能は，両者の向癖が相似するとき，換言すれば同じ対象に働くとき，互いに作用を扶け合う」(1:339)

ことを指摘する。情念はあくまで，想像の作用の一つの特殊な局面とみるのである。すなわち，

「他のあらゆる事物の知覚から独立なわれわれ自身というものは真実には無である。そのゆえに，われわれは視線を外的事物に向けざるを得ないのであり，したがって，われわれに接するもの，あるいはわれわれに類似するものに最大の注意をもって考えることは，われわれにとって自然である。」(1:340)

ヒュームが『人性論』第一編において説いたように，観念に自然に他の観念を導出させる一般的関係は，類似・時空的近接・原因結果の三である。しかし，情念には類似のみが関係としてあるのであり，心が他に注意を向けるとき，想像の機能の扶けに頼るのみである。したがって，われわれ自身の人格同一性を明らかにする手続きにおいて，思惟にする場合と情念に関する場合との二つに分けたが，想像ないし思惟が自我を対象とする手続きをふまずにはわれわれは様々な情念・情感を捉えることはできないという意味である。

第二に，自己の快苦の定義が，ヒューム自身が納得するものか判然としない。第一編の「原因結果を判断する規則」において，ある程度の熱は快感をもたらすが，ある程度を越えた熱は快感を苦痛に変えると指摘するように(1,174)，そもそも移ろいやすい情念情感を，不確かな勢いや活気を目安に整理分類することを可能とみることはなかったと考えられるからである。

(三)

第二編第三部は意志及び直接情念を扱う。ヒュームは第一・二部において情念の生起の条件の解明に専心したが，ここで冒頭において振り返り第一・二編の考察をまとめる。だが，引き出した観察はヒューム自身を当惑させるものである。

「情念とは，…なんらかの善福又は禍悪があらわれたとき，あるいはわれわれの諸機能の根源的規制によってある嗜欲を喚起するのに適した事物があらわれたとき，心に起こる強烈な目だった情感である」(1:437)

「理知とは…これと全く同じ種類の情念であるが，一層穏和に作用して，気分に少しの紊乱も引き起こさないようなものである。」(1:437)

理知と情念とには本質的な差異は認め難い。両者の差異は「強烈である」か「穏和である」かにかかり，「一般に強烈な情念は，意志への影響が，穏和な情念よりも強力である」。「理知は情念の奴隷であり，かつただ奴隷であるべきである」(1:437)というとき，理知と情念とはその強烈さの差異しか認められない。

このような考察はまさに，ヒューム哲学の真髄を表す言明によって続けられる。

「このいわゆる情念と理知との争闘は人生を多岐ならしめて，実に人々を相互にはなはだ異ならせるだけでなく，時を異にすれば同一人をも異ならせるのである。」(1:438)

事物の連関はただ人の心の中にあるという知性についての考察は，決してそこに終わるものではなく，そのような人の心の中には，時によってさまざまな心の働きを認め，その多様さ複雑さこそがありのままの心であると見るのである。

ヒュームが，『人性論』における自己の見解のもつ意味に当惑したのは，決してこれが最初ではない。因果帰属の解明において，ある推理に信念ないし確信を持つのは，

「心がひとたび現在印象によって生気づけられるときは，印象からそれと関係ある観念へ移る心的性向の自然的推移によって，心は，関係のある対象のさらに生気ある観念を造るようになる」(1:97)

ことであるとした。すなわち，信念は「現在印象と関係したすなわち生気ある観念」であるとして，いわゆる主観主義的理論の袋小路に入りこむ。詩的虚想と信念との識別は困難になり，『人性論』付録において，信念は「ある特殊な感じ」(1:624)として修正される。

知性そして情念についての考察における核心部におけるこの躓きをヒュームがどのように受けとめたか，推測しがたい。しかしながら，ヒュームは第三編の教説を予感させる言葉を続ける。

「哲学はただ僅かにこの［理知と情念との］戦いの比較的目だった出来事の少数を説明出来るだけであり，他のすべての比較的小さな微妙な変転は，哲学の了解するにはあまりに繊細かつ微小な原理に依存するため，これを捨て去らなければならない。」(1:438)

ヒュームにとって，このような考察はあくまで真実を追求する過程における経過の報告でしかない。『人性論』序論における，

「人性の究極・根源の性質を見いだしたと称する仮説は，いかなるものも僭越・虚妄として初めから斥けるべきである。」(1:xxi)

とした態度は徹底している。

(四)

では，なぜヒュームは後年『人性論』の体系的統一を解体し，哲学三部作に書き換えたのであろうか。

『人性論』の第一編・第三編の書き換えはその後のすべてのヒューム研究家において，改良進歩を見いだすことは困難と考えられるものである。しかし，ふりかえって見るならば，当時の読者のほと

んどは『人性論』を知ることなく，ヒュームの哲学については書き改められた『両研究』を知るのみであった。そしてヒューム自身が「完全」と認めたのが，『両研究』である。いったいヒュームの視点はいずれに向けられてたのだろうか。

先に触れたように，初期のヒュームにおいて，哲学著作と歴史・社会著述がほぼ同時進行であった時期が存する。そして，『両研究』のうち，『人性論』第一編の書き換えである『人間知性研究』（最初は『人間知性に関する哲学的論想集』と題される）は『人性論』の八年後に公表される。しかし，その間『道徳政治論集』出版，フランス遠征等身辺多忙であったことから逆に，書き換えはきわめて早い時期に構想されたものと思われる。『人性論』が早熟なヒュームが主にフランス滞在期に書き上げたのに対し，書き換えはその不評に文名を揚げることを願っていたヒュームがなにかの対策を講じる必要を痛感した故と考えられる。そうであれば，哲学に深い関心をもつ狭い読者向けの主題はほとんど削除された『両研究』が深遠な哲学論議よりも，一般的に哲学思想に関心をもつ広汎な読者を対象に書かれたものであることは容易に了解することが出来る。かれの母国スコットランドにおいては教育が普及し，広汎な読者層が存在していたが，広汎な読者層を想定していたことは，まもなく『様々な主題についての試論と論文』と題する著作集にそれが収録され，版を重ねたことからも理解出来る。

確かに，『人性論』は周到精巧な議論の構成が目につく著作である。第三編冒頭において，自ら「晦渋」で「抽象的」であると認める第一･二編のなかでも，「情念論」は，主要な四つの間接情念を軸にして組み上げた入念細密かつ晦渋抽象的な議論である。第一・二編が「完結した一連の主題」をなしているのであれば，第一編に向けられた懐疑論また道徳的懐疑主義の擁護であるという批判は，そのまま第二編にも向けられるものであるのは当然である。第三編に早くから手を入れていたヒュームが第二編の内容について，完成直後から自分で大きな不満を感じ，十数年後の書き換えにおいて最も大きく手を加えほとんど断片のみにしたのも，頷けるというべきである。

だが，『人性論』第二編にヒュームが「内容上」大きな欠陥を見いだすことと，後年それを書き換えとき，目指したことは必ず整合的である保証はない。それでは視点をかえ，ヒュームが三部作への書き換えにおいて，すなわち『人性論』後になにを自己の哲学の最大の特徴として訴えかけようとしたかを探ることを今後の課題としてみたい。

書き換えられた三部作は明らかに習慣的連合を基本原理としている。本来想像によって習慣的連合の観念が産み出されるのであって，習慣的連合を基本原理にすることはあくまで一般読者にむけての理解の容易な説明の便法にほかならない。しかし，全体としては，丁寧な論理の積み重ねはみることは出来ず，たとえより広汎な読者を想定して書き換えられたとしても，書き換えを正当化する理由は見いだすことが困難である。ヒュームの哲学体系の書き替えにおいて，顕著な内容上の変更は，第一編の純粋に哲学上の主題の放棄とともに，第二編後半において重要な位置を占めた共感の原理が第二編の大幅な圧縮にともない，第三編の書き替えである『道徳原理研究』に移動される点にある。これ

はいったいいかなる意図判断にもとづくのか考察することが必要であるが，次稿の課題としたい。

とりあえず，以上の考察において明らかなことは，ヒュームが理知と情念との立ち入った考察を開始したこと。そこで，情念の生起の条件を解明するための基礎として，想像の機能，起源の解明を用いたこと。情念の生起の条件の追求は，丁寧入念な論理の組み上げとなったが，ヒューム自身内容に納得しうるものにはならなかったこと，である。現在の科学知識の水準から見れば，ヒュームが解明した心の機能ははるかに低い水準にあると言えよう。しかし，ヒューム自身がみた「内容上」の失敗を「失敗」とみることは，即座にはなしえないであろう。むしろ，いくつかの近年の科学知見はかえって認知・思惟と情念・情動との区別の困難さを指摘し，研究がようやく緒に就いたことを指摘する（5.6.8.9.10.13）。むしろ，ヒュームの情念研究はあまりに尚早であったと見るべきである。

文献：（引用は初めに以下の文献番号，その後に該当書の頁数を示す。『人性論』の訳は大槻訳に準じたが，論者の判断で若干変更した。）

1．Hume, David, *A Treatise of Human Nature*, eds. L.A.Selby-Bigge and P.H. Nidditch, (Oxford: Clarendon, 1975)「人性論」大槻春彦訳（岩波文庫、1948-52）
2．*Enquiries concerning Human Understanding and concerning the Principles of Morals*, ed. L.A. Selby-Bigge and P.H.Nidditch（Oxford, 1975 ）
3．*Dissertation on the Passions*, in Green, T.H. and Grose, T.H. eds.［1874-75 ］*Philosophical Works of David Hume*, 4vols. (London)
4．Greig, J.Y.T.,ed. ［1932 ］ *The Letters of David Hume*, 2 vols. (Oxford)
5．ダマジオ ［2000］『生存する脳－心と脳と身体の神秘』田中三彦訳（講談社）
6．ルドゥー［2003］『エモーショナル・ブレイン－情動の脳科学』松本元・川村光毅他訳（東京大学出版会）
7．Ardal, P.S.［1966］*Passion and Value in Hume's Treatise* (Edinburgh)
8．Damasio, A.［2003］*Looking for Spinoza; Joy, Sorrow, and the Feeling Brain* (Orlando)
9．Le Doux, J.［2002］*Synaptic Self; How Our Brain Become Who We Are* (N.Y.)
10．Leventhal, H. and Scherer, K.［1987］'The Relationship of Emotion to Cognition: Functional Approach to a Semantic Controversy', *Cognition and Emotion*, 1 (1) 3-28.
11．Norton, D.F.［1982］*David Hume; Common-Sense Moralist, Sceptical Metaphysician* (Princeton)
12．Penelhum, T.［1975］*David Hume* (London)
13．Stoker, M.［1980］'Intellectual Desire, Emotion, and Action', in Rorty, A.O. ed. *Explaining Emotions*（Berkeley）